

# 第46号 華山会報

令和3年4月11日

公益財団法人華山会

## 椿椿山筆「日光道中真景図巻」随想

根津美術館学芸第二課長 本田 諭



椿椿山が描いた「日光道中真景図巻稿」が突然出現したのは、平成十九年（二〇〇七）の事だった。とある入札会の分厚い目録に目を通していたところ、白黒のさして大きくもない図版が目にとまった。目録には「椿椿山 日光真景図巻」とあり、確かに日光の風景が描かれているようだ。当時、栃木県立博物館に古美術担当研究員として勤務していた私は、早速東京で開催された下見会まで赴き、作品を見つけた。大量の古書画が無造作に並べられた会場で、鍵のかかるケースに入れられるわけでもなく、他と紛れるように置かれた桐箱に手を伸ばし、中を開く。そこには、確かに椿山真筆であろう、生き生きとしたタッチで日光道中の風景を描いた十五の真景図が眠っていた。直ちに、『国華』掲載の椿山筆「日光真景画巻」の白黒図版コピーと見比べたが、図様は全く同じながら、落款や絵には僅かに異なる部分が存在していることが判明。おそらく現所在不明の国華本が本絵、つまり完成作で、この作品は最終段階の下絵（稿本）、いわゆる大下絵であろうと判断し、極めて貴重な作品であることを確信した。その後に行われた入札では、幸いにも過去の資料購入を通して面識のある業者が落札し、さらに栃木県にとって重要な作品であることをご理解頂き、ごく僅かな手数料を上乗せしただけの、ほぼ落札額同然という破格の条件で栃木県博に譲って頂けることになった。この業者の方には、今でも感謝している。

その後の調査で、華山がこの作品の図様をそのまま「全楽堂日録」に引用していることが分かり、二人の密な関係性を再認識したことは強く印象に残っている。また、田原市博物館のご厚意で調査させて頂いた「日光道中真景」と題する二件の画稿類が、この作品の大きくなる、実際に現地で描いた椿山自筆スケッチと分かったときは感激した。これにより、椿山による実際の制作過程が具体的に想定可能となったからだ。これで本絵があれば全てが揃うのに、とは思ったものの、何せ『国華』への掲載は大正十年（一九二一）。おそらく関東大震災が被災したのであろうと漠然と考えていた。

これら調査の成果はのちに論文として纏めたが、その後、とある学芸員から白黒の紙焼き写真を見せられたときは仰天した。まさに所在不明の本絵そのものだったからだ。氏によると、丁度バブルの頃になじみのない古美術商から購入を持ちかけられた際に貰った写真だという。結局予算の関係で断念し、しかもそれ以降没交渉であったため、相手の名前すら思い出せないとのこと。大変残念ではあるが、現存することが分かった以上、いつか必ずひょっこりと姿を現すことだろう。それこそ、栃木県博に入った稿本のように。今でも各種の目録が届くたび、もしかやこの中に本絵が……と期待に胸を躍らせながら頁を開いている。

『全楽堂記伝』(五)

— 華山伝記の根底テキスト —  
 研究會員 別所興一

前号で紹介したように、華山は家老職の退職願の受理を切々と訴えたが、さらに願書の読み手の同情心をかき立てるために、自叙伝的な回想文を次のように書き添えている。

「そもそも私十二歳之時、日本橋辺通行仕り候節、わすれも仕らず、備前侯之御先供に当り、打擲を受け候時、子供ながらも大息仕り候は、右備前侯、御年大体同年位にて、大衆を引き、御横行成られ候事、同じ人間にて天分とは申しながら、発憤に堪ず、今より何也と志し候はゞ、如何なる義にても出来申すべしと存じ……」

忘れもしないことですが、十二歳の時、江戸日本橋を通りかかった際に、岡山藩主池田侯の行列の先導者に突き当たり（考え事をしていただけ）、打ちのめされました。子供な

がらも嘆息したことは、池田侯が自分と同じ位の年頃なのに、大勢の家来を引き連れ、わが物顔で振る舞っていたことです。同じ人間なのに身分の違いで、このように真逆の境遇となったことに、憤慨せざるを得ません。今から何らかの志を立てれば、不可能ではないと思えますが……

この場面は、「立志」と題する華山劇に仕立てられ、昭和二年（一九二七）から地元の小学校で上演されてきた。

しかし、当時の池田侯の実年齢は、三十六歳だったから、境遇の違いによる不条理を際立たせるため、華山が文学的に潤色したと思われる。

原文は割愛するが、次の記述によれば、華山は顔なじみの高橋文平に今後の身の振り方を相談したところ、貧乏武士でも学者として大成すれば、大大名とも対等で面接できるから、藩儒の鷹見星臯に師事して儒学を勉強するようにと助言され、そうすべく決心した。しかし、父親が二十年来の持病で寝込んでいたため、日夜その看病に明け暮れた。そ

の上、幼少の七人兄弟がおり、その養育は母の手だけでは足りないため代行せざるを得ない日々だった。よんどころなく弟を出家させたり、妹を旗本へ奉公に出したりした。一家の貧窮は筆紙に尽くしがたい状態だった（田原藩の厳儉令のため、老祖母を含め十一人家族なのに、実収はわずか二十五石）。それ故、儒学に励む余裕はなかった。

「その寒苦艱難の内、幼少の弟を私十四歳ばかりの時、板橋まで生別れに送り参候時、雪はちらちら降り来り、弟は八、九才にて見もしらぬあら（荒くれ）男に連れられ、跡（後）振り向き振り向きわかれ候こと、今に目前に見え候如く御座候。右弟は定意と申し、後に熊谷宿（埼玉県熊谷市）にて客死仕り候」

この場面は、前掲の「立志」と同じく「板橋の別れ」と題する華山劇に仕立てられ、地元の小学校で久しく上演されてきた。その前史があり、明治三十三年（一九〇〇）から昭和十五年（一九四〇）の修身（道德）

目次

題字「華山会報」元華山会理事  
 故小澤耕一氏

P ① 椿椿山筆「日光道中真景図  
 卷」随想 本田 諭

P ② 全楽堂記伝(五)別所興一

P ⑤ 華山会学童書道展

P ⑥ 渡辺華山「毛武游記」②③

加藤克己

P ⑧ 「訪貳録」の写本「南葵文庫  
 本」と書筆者 源義珍  
 中村正子

P ⑩ 四州真景の旅 ⑨  
 中神昌秀

P ⑭ 令和2年度華山・史学研究  
 会研修視察  
 田原市内の華山の足跡をた  
 ぶる 鈴木利昌

P ⑰ 公益財団法人華山会  
 田原市博物館  
 からご案内

科の国定教科書に、*兄弟愛*の模範像として、挿絵入りで記載され、全国に知れわたっていた。

ただし、この文中の華山と弟の年齢表記は間違いで、板橋の別れの時期は史実では華山二十二歳、弟十二歳であった。『立志』の場面と同じく、ここでも劇的な感動を高めるために、*潤色*が行われている。

この場面の続きに、一家の口減らし（養育できないため他家に出す）のため、別の弟や妹も、旗本屋敷に奉公に出したり、貧家に嫁がせたりして不幸な死に目となったことをあらわに記述し、私の幼少期のこんな窮状をご理解下さい、と訴えている。

さらに、母の実情については、つい最近まで夜中に布団や寝間着を使わず、破れ畳の上にごろ寝していたこと、病夫の高価な薬を買うため日々の食事にも事欠く状態で、畳や建具以外のものはたいいてい質草に出してしまい、親類にも借金をし尽していたことを記している。後年、華山がマザー・コンプレックスともい

える過剰なまでの母親思いの言説を、いろんな場面で表明したのは、幼少時のこうした体験の記憶に因るのではなからうか。

渡辺家は田原藩内では上級武士の家格にありながら、家計がどん底状態だったことがわかる。

こんな次第で高橋文平に再度相談したところ、学問をやって儒学者になっても、金がとれるわけではないから、今は何よりも家計の貧困を救う事が第一だと助言され、尤もと思つた。それで鷹見先生に頼み芝の白川芝山という画家を紹介してもらい、十六歳の時にその画塾に通うようになった。

しかし、貧家のため謝金が少なかったせいで、わずか二年で破門され、泣き沈んでいたところ、間もなく父の縁故紹介で金子金陵（谷文晁の門人）に弟子入りすることができた。金陵は殊のほか私に同情して指導してくれたので、私の画技は少々向上するようになった。

とはいえ、画材の半紙を購入でき

ないほどの貧乏生活だったので、初午（二月最初の午の日の祭礼）灯笼の絵を描いて、百枚銭壹貫（千文）で日本橋の業者を買ってもらい、その銭で紙や筆を調達した。

学問をしたいと思つたが、その暇がなかったため、冬の日は朝七つ時（午前四時）に起きて飯を炊き、その焚火で読書した。これは文晁先生

が私に同情して、画道に取り立ててくれた際に、先生が毎朝早起きして画を描いたという話を聞き発憤し、それを真似ようとしたからである。

その結果、私の画作は少しずつ内職収入となり、学問に励むゆとりも生まれるようになった。

ここから話は一転して、その後の約十年間にわたる藩財政窮乏に伴う藩内の風紀の乱れを紹介している。

例えば、心得の宜しくない連中が指導者格になり、勤番の者をそそのかして遊所通いをさせたり、役付きの者が藩侯の威光を笠に上下の身分を乱したり、古道具の売買や婚

礼の仲介を内職にする者があらわれたり、といったありさまである。また、藩財政の元締が奢侈になつたり、藩士が徒党を組んで強訴したり、あげくの果ては出奔したり、藩籍離脱したりする者が出る始末となつた。

こんな浅ましい状態が十年近く続いていた頃、私が二十六歳の正月元旦に、有志が鈴木孫助宅に集まつた際に、私は「諸君も私も今から心がければ、困苦にある藩侯の御政道をお助けする手段があるはずだ」と提言し、藩政改革に努めることを誓約した。その折に「**見よや春大地も亭す地虫さへ**」という俳句を作つた。

ちっぽけな地虫でさえも、春になれば大地を突き通すのだから、自分たちの改革もできないはずがない、という思いを込めた句だった。

改革を目ざす有志は、最初に高名な儒学者の佐藤一斎にその学塾への通学、それも昼間は勤務があるため、夜間の通学を許可してほしいと依頼した。一斎は趣旨をよく理解して、藩士の夜間の門限を延長するよう、

藩重役を務める私の父君に頼んでくれた。それで私は、父を通じて家老職の村松六郎左衛門に、学塾に通学するため夜間の門限を延長してほしいと願ったところ、村松は「儒学者でもないのに、通学を理由とした門限の延長はまかりならぬ」（実は若い藩士が通学を口実にして夜遊びすることを憂慮していた）と拒絶した。改革の第一歩を踏み出そうとした有志は、出鼻をくじかれたわけである。

それで私がつらつら考えたことは、次のようなことだった。主君への忠義や親への孝行の教えは、学問することによって理解し身につくものだから、無学無術では達成できない。こうなった以上、いよいよ画作に専念して貧家を助け、少しでも親を安心させたい。藩の職務に一生従事することなど、もはや思いもよらないことである。さしあたっては親の貧を助け、長期的には天下第一の画工になるよう努めようと決心した。かくなる上は藩の職務を継続しては目的を達成できないので、

内々に両親に廃嫡を願ったところ、以ての外と申し諭された。

それでも決心を断念できなかった。次のように考えた。今の状態では家計の助けになる画を描くこともできないし、まして天下第一の画家になることなど、断念しなければならぬ。古人の遊学の例にならなくて、目前の小孝を尽くすよりも、後々の大孝を尽くすことを目ざして留学することは、大道からはずれた過ちとは言えないであろう。

私はそう考えて、秘かに長崎へ留学することを決意した。その際の書き置きのためと考えて、次のようなつまらない漢詩（読み下しにした）を作った。日記に書き留めたものであるが、ご笑覧ください。

**嘖ふなかれ、鷓鴣の鵬雲を試むるを。**

**決起して楡を捨き、初めて分を見る。**

**遊子もとより知る、風木の嘆き。**

**花朝月夕、何ぞ君を忘れん。**

ミソサザイのような小鳥が鵬という大鳥を真似て、空高く飛ばうとするのを笑わないでください。小鳥が

発憤して飛び立っても楡の大木に突き当たって墜落し、身の程を知るだけです。留学を決意した自分も、その間に親が死んでしまつては孝行できない嘆きを知っています。それ故、春の朝や秋の夕べの時も、どうして両親のことを忘れられましようか。

華山はその後、次のように書き足している。小鳥が大鳥を真似ようとするのは、身の程知らずの愚行のようには言われるが、その反面、容易に達成できない大志を持って、とも言われる。また、『徒然草』には「自ら

思い立った事は、破綻しても顧みずに突き進め」とも書かれており、私自身も行ける所まで行ってみたくと思った。しかし、『孔子家語』には

**「子養はんと欲すれども、親とど**

**まらず、木定まらんと欲すれども、**

**風止まず」という言葉があるので、**

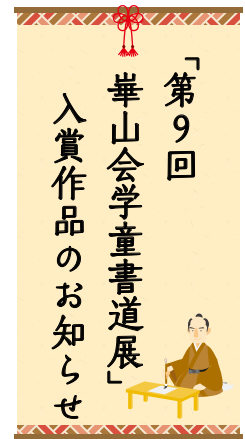
一旦学び終えたら、早々に江戸に帰り、孝養したい。そんな思いを込めた詩を残して、家を出ようとした。

しかし、親父はいち早くその様子を察知して心配し、太白堂菜石（私

の友人の俳人）らに相談して、私の本心を見抜いたようである。

その頃、私が夜遅く帰宅した時、親父は病体にもかかわらず、途中まで私を出迎えに来ていた。親父は私に気づかれないよう帰宅し、私が帰宅すると、何食わぬ顔で私に挨拶をした。私は胸がふさがり、秘かに涙で両袖を濡らした。この一事に感動し、またしても私の決意はくだけ果てたのである。

華山の長崎留学は、その地で最先端の明清画や洋画に接して画技を高めたという思いに基づいていたが、自分を心配する病父の姿に後ろ髪を引かれ、決行できなかった。華山は同志の高野長英と同じく、近代的な自我や感性の持ち主だったが、長英のように親族や婚約者の反対を振り切つて、長崎留学を執行することはできなかったのである。哲学者の鶴見俊輔は、自分の先祖の家系につながるのがある長英の評伝で、華山を封建最後の一人、長英を近代最初の人と評したが、けだし至言である。



公益財団法人華山会では、郷土の偉人渡辺華山の遺徳を学ぶ機会として、学童書道展を開催しております。田原市内の習字教室に通う小学生、中学生を対象に作品の募集をしたところ、小学生154点・中学生41点の応募がありました。応募総数195点の中から、優秀作品56点を選定し、そのうち特選作品9点をご紹介します。

ご応募いただきました皆さんやご協力をいただきました習字教室の先生方に厚くお礼申し上げます。

公益財団法人華山会



低学年の部

入選

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 土井 瀬七 | 小久保晴海 | 山本 葉名 |
| 宮本 聖琉 | 伊藤 桜成 | 森本 友菜 |
| 吉田 由弥 | 寶藏寺花音 | 藤井 環希 |
| 太田 光咲 | 久保山結衣 | 小久保実咲 |
| 田中のどか | 加藤 滯  | 木村陽央莉 |
| 渡会 彩太 | 小久保仁湖 |       |

高学年の部

入選

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 吉田 由理 | 津田香羽子 | 鈴木 菜帆 |
| 井本 有咲 | 森 悠香  | 大下 侑記 |
| 小久保拓馬 | 田中 詩乃 | 橋本 桃花 |
| 田中 咲帆 | 小久保紗耶 | 渡邊 唯央 |
| 山本華里那 | 石黒未梨花 | 小久保歩海 |
| 渡会 桃音 |       |       |

奨励賞

- 榎原 柊稀 中村 華蓮

- 川口央慈郎

中学生の部

入選

- |       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 石倉 莓奈 | 木戸 藍美 | 牧野 琥珀 |
| 浅野 真尋 | 河邊 愛佳 | 秋元 碧海 |
| 川口 累乃 | 岸友 杏里 | 小久保敬太 |
| 吉岡 美咲 |       |       |
| 奨励賞   |       |       |
| 小久保結月 |       |       |

渡辺華山『毛武遊記』

(23)

研究會員 加藤 克己

天保二年（一八三一）十月二十三日続き

足利の旅館葛屋に宿泊していた華山たちは、朝まで同宿していた五十部村の岡田東塙（立助）の屋敷を訪れることとなった。東塙は準備のため先に帰り、華山たちは三輪宗琢の道案内で、東塙の屋敷を訪れた。

いたれば門扉いとたかし。前に此さとのうたへ事せるもの、やすらふ小屋あり。玄関にハ弓鉄砲など打かざりて、ゆゝしき村侯なり。岡田氏、とくよりまちつけて出むかひまつ。庭のかたより入候へといふにより、直にざしきに到る。清人のかきし書画あれば、見もしうつしもするうち、浴せよといえバ湯に入る。

（岡田東塙の）屋敷に到着すると、門扉がたいへん高い。屋敷の前にこの里の訴訟をする人の休む小屋がある。玄関には弓や鉄砲などが飾ってあり、村のりっぱな領主である。岡田東塙は、早くから待っていて、出迎えてくれた。「庭の方からお入りください」と言うので、直に座敷へ行った。清の人の書いた書画があったので、見たり書き写したりしていると、「風呂へ」と言うので、湯に入った。

※ うたへ事 訴訟。

※ ゆゝしき 程度がはなはだしい、重大である、

神聖で恐れ多い、忌まわしい、疎ましいなどの意味もあるが、ここでは、すばらしい、りっぱである、の意か。

※ 村侯 村の領主。

※ とく 疾く。早く。時間的にさかのぼった時点。ずつと以前に。

※ うつしもし 天保二年の『客坐録』に清の人の書いた絵と人名を写したものが四つほどあるが、岡田東塙の屋敷で写した書画がその中

にあるかどうか不明。

※ 浴せよ まだ午前であるが、湯に入れるのが客に対する大いなるもてなしだったのだろう。

その妹なるもの出てもてなす。抑立助が家のさまハ、父母なし、妻ハ世をさりしや、男ありて江戸の邸にいゆきておらず。妹あり、桐生の某のものとへかしづきしが、熟さずしてかえり、家にある。立助妻なきをもて内政をなすといふ。

東塙の妹という人が出てきて、もてなしてくれ。そもそも立助の家族は、父母はなく、妻は世を去ったのだろうか。息子はあるが、江戸の屋敷に行っていて留守だった。妹があり、桐生の某のものとへ嫁いだが、離縁して戻り、家にいる。立助の妻がいないので、代わりに家政を切り盛りしているという。

※ 妻ハ世をさりしや 華山の推測である。姿が見えないので、亡くなったのかと思った。涌田佑著『平成校注「毛武遊記」』には、「真尾

源一郎氏の調査では、妻は江戸の屋敷にでも別居中だったらしく、その没年は天保五年、享年四一歳という。墓は立助のと同じく五十部の浄林寺にあったが、後、霊樹寺に移された」とある。

※ 男 息子。男子。

※ 熟さず 離縁した。その家になじまなかった、という意味。

※ 内政 ここでは、「家政」の意。一家の暮らしをうまくまとめていくこと。

立助ミヤびなるおのこに侍れば、常に風月のためにいで、幾夜も家にかえらぬ事多し。されバ此属吏ども後を追ひあるき政を聞、その不羈なる如<sup>レ</sup>此<sup>ヲ</sup>。いと多病にて今も病を称し、難苦をとなふ。病のために酒を禁<sup>ズ</sup>す。

立助は風雅な男なので、常に風月をめぐるために外出し、幾夜も家に帰らないことが多い。それで、その下役の者たちは後を追いかけて村政の指図を受ける。立助の勝手気ままな生活ぶりはこのようである。たいへん多くの病を抱えており、今も病いと称して、困難や苦しみを口にしている。病のために禁酒している。

※ ミヤび 雅。風雅。優雅。

※ 風月 心地よい風と美しい月。自然の風物。

※ 属吏 地位の低い役人。下役。

※ 不羈 物事に束縛されないで、行動が自由気ままであること。また、そのさま。

※ 難苦 苦難。困難や苦しみ。



岡田東塙屋敷跡（足利市五十部町）

※ 病のために酒を禁ず 前日の記事には「皆大酔いした」とあるが、ここには、岡田が禁酒している、とある。前日、皆が大酔いした時、岡田は一人だけ飲酒しなかったのだろうか。それとも、その日はかりは禁を解いて皆と一緒に飲酒したのだろうか。

酒肴飯出づ。厚くもてなすなり。ミナ可<sup>レ</sup>食<sup>ス</sup>。山鳩を此こものがまとりしとて、あつものにしいる、いとうまし。

酒、肴、飯が出た。厚くもてなしてくれられた。皆おいしく食べられた。山鳩をここの奉公人が生け捕りにしたと言って、あつものにして出してくれた。たいへんうまかった。

※ こもの 小者。身分の低い奉公人。

※ まとりし 自分の家で飼って訓練した鷹を使つて獲つた。

呂元<sup>りげん</sup>画帖をかりかえる。懇留す。さきいそげバふりきりて奔りいづ。はるかにげのびて回見るに、昌庵、梧庵引とめられ、門の外にたゞずミ、予が去るを見てまねく。蘭溪とひとしくしらぬ道たどり帰る。

呂元の画帖を借りて帰った。懇留されたが、先を急いでいたので、振り切つて走り出た。遠くまで逃げてから振り返って見ると、昌庵と梧庵が引き止められ、門の外にたたずんで、私が去るのを見て招いている。蘭溪といっしょに知らない道をたどつて帰った。

※ 呂元<sup>りげん</sup> 生没年不詳。清の画家。呉興の人。山水・人物画に優れている。

※ 回見る 後ろを振り返って見ると、の意か。

途中よりウルカの醬<sup>じょう</sup>に詩つくりて、人をやとひ、

岡田氏にいたす。

素質少<sup>シ</sup>顔色<sup>ニ</sup> 逢<sup>レ</sup>君<sup>ニ</sup>得<sup>レ</sup>品評<sup>ヲ</sup>  
従来瓢零<sup>ノ</sup>物 莫<sup>カレ</sup>道<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>無情<sup>ト</sup> 落花

途中で鮎のはらわたや卵を塩漬けにした食品に詩を作つてつけて、人を雇つて、岡田氏のもとに送った。

私は、生まれつき感情の動きを顔にあらわすことが少ない。

君に逢つて、高い評価をいただいたが、以前から私は、さすらい歩く者。

※ ウルカ 鮎のはらわたや卵を塩漬けにした食品。酒の肴として珍重。

※ 醬<sup>じょう</sup> 魚・鳥などの塩漬け。肉びしお。街道に面してウルカの醬を売っている店があったのだろう。

※ 人をやとひ 配達してくれる人を道中で急に雇うのは簡単ではないだろう。持ち逃げせずに確実に届けてくれる人でなければならぬ。商品を売っている店が配達員を確保していたのだろうか。

※ 顔色 感情の動きの現れた顔のようす。

※ 瓢零<sup>ひょうじょう</sup> 木の葉が風でひらひら落ちること。落ちぶれること。

※ 無情 いくつしむ心がないこと。思いやりのないこと。また、そのさま。

※ 落花 五言絶句の後にあるが、この詩の題だろうか。

（続）

『訪貳録』の写本「南葵文庫本」と  
書筆者 源義珍について  
研究会員 中村 正子

◎『訪貳録』とその写本

『訪貳録』は渡辺華山が田原藩主三宅康直の命を受け、三宅家御系譜調査のため天保二年（一八三一）十一月に旧領三ヶ尻を踏査し、天保三年八月頃（『全樂堂日録』記載による）に藩主に献上した報告書（序文・本文・図絵二十枚）である。

華山自筆の『訪貳録』は昭和初年頃に豊橋市の鈴木まさ氏の手に入り、その後青森県五所川原町の佐々木嘉太郎氏に移り、昭和十九年五所川原町の大火で焼失した。現在この自筆本は

- ・恩賜京都博物館編『華山先生画譜』  
昭和三年 鈴木まさ子所藏（図絵二枚）
- ・東京美術青年会編『渡辺華山先生錦心図譜』  
昭和十六年 佐々木嘉太郎所藏（序文・本文の一部・図絵二十枚）
- ・塔影社発行「塔影」十四巻六号 昭和一三年（図絵四枚）

掲載の写真で見られるのみであるが、稿本、複数の写本で全容を知ることが出来る。

熊谷市三ヶ尻の龍泉寺所蔵の「龍泉寺本」は上下の二巻本、表紙題簽に「稿本」の文字がある。図絵には「梧庵摸」「如山摸」の落款があり、高木梧庵と渡辺如山が華山の図絵を模写したものである。この「龍泉寺本」写本系に「内閣文庫本」「国立国会図書館本Ⅱ」「大沢本」「蓮沼本」がある。

田原市所蔵の写本「鈴木まさ自筆本」は三巻本で華

山自筆本が佐々木氏に移る前に鈴木氏が丁寧に書写したものとされている。この三巻自筆本『訪貳録』には「龍泉寺本」に見られない華山筆と考えられる振り仮名（名利繁心ワルモウケ）（桃源集落ヨキイナカ）などが多く見られる。三巻自筆本写本系には「南葵文庫本」「鐫木本」「国立国会図書館本Ⅰ」「熊谷市立図書館本」がある。

◎『訪貳録』写本「南葵文庫本」の概要

「南葵文庫本」は表紙に天地人合冊とあり、表紙裏には（東京帝国大学図書印）一頁目には（牧氏蔵書之記）（坂田文庫）（南葵文庫）の印が捺され、裏表紙に南葵文庫購入月日明治三十六年三月二十一日の印がある。現在この写本は東京大学総合図書館に所蔵されている。

（坂田文庫）は坂田諸遠（文化七〇明治三十、筑前秋月藩士、国学者、官吏）の文庫であり、現在は南葵文庫（東京大学総合図書館）、福岡大学図書館などに収められている。

（南葵文庫）は旧紀州侯徳川頼倫が藩邸に明治三十四年創設した私設図書館で、蔵書は大正十三年東京帝国大学附属図書館に寄贈された。

「南葵文庫本」の文字・行送り・頁送りは総て「鈴木まさ自筆本」と一致しているが、漢文で書かれた序文、五頁三行目に表記の違いが見られる。

則此稿尤足其採用者也（南葵文庫本）

則如此稿尤足不可止者也（鈴木まさ自筆本）

「南葵文庫本」の表記は華山自筆本（渡辺華山先生錦心図譜）の写真と一致しており、「龍泉寺本」「市立熊谷図書館本」「内閣文庫本」「国立国会図書館本Ⅱ」も同じ表記である。

「鈴木まさ自筆本」の表記は「鐫木本」「国立国会図書館本Ⅰ」にあり、活字本『華山全集』（華山会）『渡

辺華山集』（日本図書センター）『埼玉叢書』（第一巻）もこの表記である。

他の写本にない特徴としては、頁の上部を広く開け、筆写の誤字の訂正、語の意味、漢字の反切（貳 仲良切）等の書き込みがある。

上部の書き込み・書写識語の筆跡と本文の筆跡の違い、本文訂正文字の多さ等から考えると、上部・識語と本文は別人の書写かとも思われる。

◎「南葵文庫本」の書写識語

下巻末には以下の書写識語がある。

右訪貳録三冊ハ三宅土佐守康直乃臣  
名登當家荷藩長  
渡邊定静著述する處なり天保五甲午  
の年穉七月同姓主計康濟より是を借受  
書写し南呂十日校合畢  
源義珍識 印



南葵文庫本 書写識語  
(東京大学総合図書館蔵)

この識語により三宅土佐守康直の臣渡邊定静著述『訪貳録』三冊を源義珍が天保五年秋七月に三宅主計康濟から借り受け、同年八月十日書写校合を終えたことが分かる。華山が藩主に『訪貳録』を献上したのが天保三年八月頃であるから、この写本は非常に早い時期に書写されたものである。

なお、本の貸主である三宅康濟について『旗本家百料事典』に「三宅市右衛門康濟・三宅主計・三宅長門守・



三宅駿河守、父三宅市右衛門康哉、五百石、小日向、天保五年書院番同組より書院番頭、天保十三年西丸目付」とあり、康済の父三宅康哉については「寛政重修諸家譜」に「妻三宅備前守康之之女」とある。つまり三宅康済の母は田原藩五代藩主三宅康之の娘であり、康済は藩主に近い家柄の者で、三宅康直に献上された『訪貳録』に接する機会もあったのではないかとも思われる。

また『華山書簡集』（国書刊行会）<sup>133</sup>「晦日某宛」にも名前があり、華山と交際のあった人物とも考えられる。

◎「南葵文庫本」の書筆者 源義珍

書写した源義珍について調査をしていたところ

二〇一九年度《現代刀職展》の展示目録に

刀銘 為牧君山浦環源正行製

天保十一庚子八月十八日

源義珍所持

という記述が見受けられた。この「牧君」と『訪貳録』「南葵文庫本」一頁に捺されている「牧氏蔵書之記」印の「牧氏」とが関係ある人物と思われるため「牧氏蔵書之記」（変形楕円形朱印）の蔵書印がある書物を調べたところ、西尾市岩瀬文庫所蔵の竹尾善筑著述『千代乃松根』巻末に

千代乃松根二冊竹尾善筑著述  
時天保五甲午年孟春写之



牧氏蔵書之記  
朱印  
(国文学研究資料館蔵)

源義珍識 印

乾仲春六日校合

坤同 九日校合

の識語があることが分かった。実見してみると「南葵文庫本」と同様上部に語の意味、反切などを付した源義珍の写本であった。

西尾市岩瀬文庫には、この他「牧氏蔵書之記」の印がある『香道雜纂』『香道雜記』『香道隨筆』『千草農露』など香道の書に書写者牧義珍とあり文化・文政期に書写された識語も見られた。牧義珍の経歴は以下のとおりである。

牧助右衛門義珍・牧備後守・牡丹波守、父牧市次郎、

一〇〇石、表四番町、寛政8家督、寛政10小姓組

入れ、文化3使番、文化9駿府目付、文化10目付、

文政2京都町奉行、文政8田安家家老、天保8留守

居、天保15老衰に付辞 『旗本家百科事典』

源義珍が田安家家老牧義珍であることは西尾市岩瀬

文庫の「旧蔵者牧義珍、旧書名『志野流組香之書』、

書名『三十組聞書』蜂谷貞重編三十冊（一七九七年成

立）装丁大和綴 能筆上写本」の帙底にある次の取得

識語で確認することが出来た。



三十組聞書 取得識語  
(西尾市岩瀬文庫蔵)

此組香三十組の書天保  
三辰とし十二月下旬

田安君より御内々の旨 中沢  
仰をうけ給り拝戴いたす 直恒  
永く家珍とす

源義珍識 印

この源義珍の印は「南葵文庫本」にある書写識語と同一である。文面の田安君は徳川御三卿の一つ田安德川家の三代当主徳川齊匡であり、義珍はその家老職にあった。香道の書を幾冊も書写した義珍であればこそ内々に拝戴したことも考えられる。

牧義珍の表記がこの時期源義珍になっている理由については不明であるが、源姓については『大宮の郷土史』28号に織本重道氏が旗本牧氏、牧志摩守義制（牧義珍の養子）の系図にふれ清和源氏義家流足利一門、斯波高経の末裔であろうとされている。

「南葵文庫本」は正確な書写・書写月日・本の所持者、そして現在に至るまでが明らかにしている優れた写本であると考えられる。

華山自筆の『訪貳録』は藩主三宅康直に献上した原本と華山の手に残した副本がある、とされている。しかし手元に稿本を所有する華山に副本が必要であったらどうか。原本について、小澤耕一著『渡辺華山研究』（日本図書センター）「華山の子たち 二男譜のこと」に以下の文がある。

明治九年四月六日諧上京し、華山筆の「訪貳録」三冊を康保に差し出す。康保日記に「右ハ売物に有之、買入候由、旧蔵書也」とある。

十二代田原藩主三宅康保が旧蔵書と記しているから、これは原本であろう。原本が明治初年にすでに市井に出ていることを考えれば、華山筆の『訪貳録』は五所川原で焼失した『訪貳録』のみであったのではないか。これについては後日の研究に俟ちたい。

『四州真景の旅』⑨  
名品「新町大手 町奉行やしき」

研究会員 中神昌秀

一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』を制作します。前回まで、その名品について書きましたが、今回も、四州真景図の名品と言われる「新町大手 町奉行やしき」を訪ねる旅を試みたいと思います。



銚子市 陣屋町公園位置図

二 「新町大手 町奉行やしき」のモデル

華山は旅の中で、下総国海上郡荒野村（現千葉県銚子市）の富豪 大里庄治郎を訪ね、「新町大手 町奉行やしき」を描きます。そのモデルは、現在は千葉県銚子市となっている下総国海上郡飯沼村にあった高崎藩銚子陣屋です。JR銚子駅から約一キロの距離に、陣屋町公園となつて敷地の一部が残っています。

陣屋町公園は、児童公園として昭和三〇年（一九五五）三月一七日に開園しました。その園内に井戸跡が一箇所だけ残っていますが、今や銚子陣屋跡地を明確に示す唯一の遺構です。



陣屋町公園 旧陣屋跡石碑

三 華山・史学研究会と陣屋町公園

陣屋町という名は、昭和八年（一九三三）に、銚子市制が施行されたとき、地域の行政区画の改正が行われ、当時西町、郭町と呼ばれていた旧字（あざ）から変わった新しい町名です。昭和二〇年（一九四五）の銚子空襲で、陣屋町地域はすっかり焼き尽くされました。また戦後に行われた都市計画事業、復興土地区画整備事業による幹線道路などの拡幅整備により、かつての面影は、跡形もなく消え去ってしまいました。

私は、平成二十二年（二〇〇九）十一月一日の華山・史学研究会視察研修で、銚子を訪れたことがあります。その目的は、『四州真景図』の調査研究でした。

「新町大手 町奉行やしき」のモデルが銚子陣屋であることや、陣屋の跡地が残っていることは知っていましたが、実際に現地に行つて初めてわかったことがあります。

陣屋町公園ですが、ブランコ等の子供向け遊具がある、ごく普通の児童公園が見えます。公園名だけが陣屋に因んだものかと思ひ、敷地の中を歩くと旧陣屋跡の大きな石碑を目にします。

さらに驚いたのが、「陣屋史跡メモリアルコア」と名付けられた記念碑です。これは、平成一九年（二〇〇七）に陣屋町史跡公園化実行委員会が、陣屋の歴史を風化させず後世に伝えるためとの趣旨で設置したものです。パネルの左には「新町大手 町奉行やしき」の真景図が見えます。



陣屋史跡メモリアルコア

まさか、華山の真景図を銚子で見ることになるとは、想像もしていませんでした。同行した華山・史学研究会の会員も驚いていました。

なお、パネルの中央は陣屋の平面図です。右は、古い地図に残された旧道に、陣屋の敷地を落とし、陣屋の位置が判るようにした図です。この図と「新町大手 町奉行やしき」とを見比べながら、現地に立ってどの位置から見たのだろうと話していました。区画整理により道路は全く変わってしまい、よくわかりませんでした。

#### 四 銚子の名称

ところで、江戸時代、銚子と言う名の村はもちろん、郡もありませんでした。しかし、銚子は当時から通称として使用されていました。『利根川図誌』にも銚子は何度も登場します。また、ヒゲタ醤油で有名な醸造業田中玄藩家の『玄藩先代集』にも銚子が見られます。なお、『利根川図誌』では、銚子の仮名は「てうし」と振られ、旧仮名は通常そのように書きますが、四州真景の旅程図では「テヤウシ」とされています。

#### 五 高崎藩大河内松平家

銚子は享保二年（一七一七）から明治までの百五十年間、高崎藩大河内松平家が領有していました。高崎藩の海上郡内の所領は一七箇村で、石高は五六一九石でした。

大河内松平家は、八万二千石ですが、高崎本領約五万石、飛地として越後国蒲原郡一ノ木戸（新潟県三条市他）、武蔵国新座郡野火止（埼玉県新座市）、そして、下総国海上郡飯沼があり、合計八万二千石となっていました。なお、菩提寺は新座市にある臨済宗妙心寺派金鳳山平林寺で、境内は一三万坪の雑木林が広がっています。

#### 六 大河内松平家支配下の銚子

江戸時代を通じて銚子は物流拠点として繁栄していました。それは、東日本の沿岸廻船が銚子港で荷を積み替え、利根川水運を経て一大消

費地である江戸への流通を行っていたことによるものです。そして、高崎藩は事あるごとに銚子の商人に対して、当時の税である冥加金・運上金を課していました。幕末になるにつれ、悪化した藩財政の建て直しや諸外国の脅威に備える為、こうした課金が頻繁に行われるようになります。新編『高崎市史』によれば、天保一〇年（一八三九）七月九日、銚子陣屋から商人に対して千二百両の納付が求められたと言われています。途方もない大金の要請に商人らは減額を要求しましたが陣屋側は拒否し、話し合いの末に千五百両を納めたとされています。

#### 七 陣屋の概要と職制

陣屋の分類としては、出張陣屋になります。これは、大名や大身旗本が、居城や居館から離れた領地を統治するために設けたものです。

陣屋の位置、大きさですが、陣屋町公園の東側三分の二が陣屋敷地でしたが、それは敷地の一部に過ぎず、さらに陣屋町の東隣にある南町区域の西半分を占めていました。南は千葉県道二四四号線（外川港線）を越え、北は銚子電鉄の線路の手前までが敷地であったと推定されます。敷地はほぼ長方形の区画で、東西×南北それぞれ約一四〇メートル程度の大きさでした。

次ページの上段右が陣屋の配置図（平面図）です。左は新旧比較図です。これは、陣屋の配置図に現在の道路や土地の区画を重ね、陣屋が現地のどのあたりにあったかが判る資料です。

陣屋の建物、構造物の配置ですが、陣屋敷地の北側から西側を水濠が囲い、井戸も、当時は三箇所ありました。中心に郡奉行の役宅兼陣屋御役所、その周囲に勤番長屋や米蔵・武器庫・製塩所稽古所それに鉄砲の射撃演習場が配され、少し離れた場所に牢屋、さらには配下役人が入



高崎藩銚子陣屋新旧比較図



「高崎藩銚子陣屋地図」弘化4年(1847)

居していた長屋屋敷が建ち並んでいました。こうした長屋のうち一棟が敷地北端、東西に長く置かれ、中央部を門として開放する長屋門になっていました。

高崎藩銚子陣屋の職制については「郡奉行ハ上士ノ末席ヨリ出デ、重役の支配ヲ受ケ、郡村ニ係ル一切ノ事務ヲ総轄ス。一名宛月番ヲ定メ一同日々役所へ出勤シ、郡方掛ト協議シ事務ヲ取扱フ。手附留役(下士)五名、米見(卒)十名有り。代官ハ中士又ハ下士ヨリ出、郡奉行ニ附属シ、日々役所へ出勤シ、一郷二名ヅツノ受け持チヲ定メ、収租其他郷村百般ノ事務ヲ取扱フ。『高崎市史』上巻四三頁」と『銚子市史』に書かれています。

八 真景図「新町大手 町奉行やしき」

四州真景図は、四巻の卷子本、いわゆる巻物となっていて、「新町大手 町奉行やしき」は四巻中の三之巻、九図になります。この図も、名品と言われる作品です。華山絵画研究の大家である菅沼貞三氏は『華山の研究』の中で「出色のもの、滑川の景地と新町大手の實景である」と書いています。また、芳賀徹氏は「セザンヌにもゴッホにもかえってなかなか見られぬようなやわらかに息づく住まいの空間を感じさせる。」と書いています。



「新町大手 町奉行やしき」重要文化財 紙本墨画淡彩 縦13.5×横27.5cm 個人蔵

銚子の象徴としての陣屋前に到着した華山一行の旅の様子を、写生したのではないのでしょうか。旅人には、目的地の銚子に到着した安堵感が漂っているように見えます。

「新町大手 町奉行やしき」と「潮来花柳」の舞台となった銚子と潮来は、東北諸藩の物流拠点となっていた地方都市という共通点があります。さらに、真景図のテーマとしても、一方は、町奉行屋敷、他方は花柳街ですが、建物を中心に描いている点で共通するものがあります。

「新町大手 町奉行やしき」は道の両側に商家が軒を連ねていて、「潮来花柳」に描かれた大門奥の花柳街ほどではありませんが、遠近法を意識し、奥の方が小さく描かれています。

建物も、「潮来花柳」の建物の色と何となく似た、薄い茶褐色の家が多く見えます。ただ「潮来花柳」と異なり、銚子陣屋や酒蔵など、所々に白壁の、漆喰らしき白い色が見えます。酒蔵の菰樽、旅人の菅笠、左の商家の看板などに山吹色が見えるのもこの真景図の特徴です。また、刀を差し杖を突く旅人の着物は藍色です。潮来花柳では、提灯等の赤がアクセントとなっていますが、ここでは、白と山吹色と藍色が、画面のアクセントになっています。そして、薄い茶褐色の家と白や山吹色や藍色とのコントラストによりこの真景図は、鮮やかさを増しています。

この図の注記は「新町大手 町奉行やしき」と書かれています。右半分に描かれた二階建

ての商家が大きいため、町奉行屋敷がどこか判らない程です。それでも、よく見ると一番奥の中央に、陣屋の大手門とも言えるべき門があります。これが銚子陣屋です。中にある郡奉行の役宅や陣屋の建物は見えません。門のすぐ上の町奉行やしきの注記と合わせて、ここが陣屋かと、かろうじてわかります。

陣屋の中の木々は、盛夏の蝉時雨が騒々しい程だったでしょう。しかし、木々は華山得意の緑を使い爽やかに仕上げている、中央に旅人を配した風景は、華山の四州真景ならではの旅の世界が表現されています。

菅沼氏は「往還を、道中笠をかぶって、長杖を突く旅人、酒蔵の前で荷を扱う下僕などが簡潔の筆端に活寫されている。今人には演劇の舞台上に見る外見られぬ、昔時の道中のさまが、ここに展開されていて、情趣の盡きぬものがある。」と評しています。

この図は道中の雰囲気というか、趣は十分に、全体にやさしい、柔らかなタッチで描かれています。菅沼氏の批評に感心し、納得しつつ、この図をじっと眺めていると、陣屋の門に向かって、江戸時代の旅の世界に引き込まれていくような不思議な錯覚に陥ります。

「新町大手 町奉行やしき」は、「利刀 常州 十里」の息を飲むような自然描写や、「潮来花柳」の粹で猥雑な所はありませんが、四州真景図の持つ独特な旅の雰囲気を、十分感じる名品であると思います。

それよりも、華山にとつては、この図を描きながら、大里邸を拠点に明日から始まる、銚子浜の磯をめぐる、写生三昧の日々に、想いを馳せ、心を躍らせていたに違いありません。

## 九 終わりに

「新町大手 町奉行やしき」は、いかがでしたでしょうか。次回は四州真景図の最高傑作と言われる「釜原」を予定しています。それでは、また。

### 参考文献

- 『飯沼陣屋考』銚子の歴史と伝説 銚子市郷土史談会編
- 『房総における近世陣屋』研究紀要28 公益財団法人 千葉県教育振興財団
- 『銚子市史』銚子市史編纂委員会
- 新編『高崎市史』資料編5 近世Ⅰ 高崎市史編纂委員会

※連載中に、一度紹介した文献は紹介を省略します。

※掲載の四州真景図「新町大手 町奉行やしき」は、原本から撮影された画像を使用しています。許可下さった所蔵者様に、深く感謝申し上げます。

令和2年度華山・史学研究会研修視察  
田原市内の華山の足跡をたどる

令和2年度華山・史学研究会研修視察は、九月二十六、二十七日、土日曜日にかけての一泊二日で行われました。今回は、華山が天保四年（一八三三）旧暦四月十五日に、田原城下を出発し、太平洋側の集落を通り、伊良湖村を経て、伊勢国神島を訪ねる旅の足跡を訪ねてみようという計画しました。この旅は、『参海雑志』という紀行日記に記録されています。原本は大正十一年（一九二二）の関東大震災で焼失してしまいましたが、幸い大正九年に稀書複製会により印刷版が作成、頒布されたことにより私達も華山自身の手による挿絵も含めて楽しむことができます。コロナ禍により、県外への行程をあきらめざるを得ない状況となり、市内のみの研修としました。

当日、午前九時、田原市博物館の駐車場に集合した会員は、石川洋一・大崎洋・大崎南千子・加藤克己・縦山伸次・鈴木利昌の六名でした。渥美半島を横断する今回の研修視察では、レンタカーを利用しました。

スタートは田原城新倉跡で、現在の華山神社境内にあたります。清谷橋を渡ったことがわかっていきますので、田原城の大手通りから総門跡を抜け、龍門寺と龍泉寺の間の道を下り、突き

当たりを右折し、寺下通りへ出て、旧江戸屋前から西進し、八軒家の集落内の旧道を田原警察署前へ出ます。県道28号線（田原街道）には出ずに、南側の旧道をしばらく走った後、加治町中恩中で田原街道に合流し、大久保へ向かいます。旅は、大久保から高松へ南下して行くのですが、今回は、研修ですので、華山一行は寄りませんが、三宅家の前の田原藩主、戸田氏の菩提寺である長興寺（大久保町）に立ち寄ることにしました。戸田家の墓所、建物には、江戸時代の建築もあり、県指定文化財の木造観世音立像を所蔵しています。



華山一行は、高松を目指します。富士見茶屋で休憩をしています。国道42号線沿いで、現代も家は建て替わっていますが、およその位置を

車窓から確認後、田原市指定文化財、巖王寺山門を見学します。次に訪ねたのは、田原藩が遠眼鏡で沖を監視していた赤羽根遠見番所です。巖王寺から太平洋へ一度南下し、海岸線沿いを眺めながら、国道42号線と並行して走る旧道を西進します。太平洋に面した土地は百メートル以上浸食されていますが、車を降りて、眼下の砂浜を一望できる平地まで徒歩で向かいます。車に戻り、華山が「諸流此池に流れ入て海にそそぐ」と書いている池尻川へ向かいます。ここは、道の駅あかばねロコステーションがあります。



越戸・土田を経て、その日の宿となった和地



の医福寺に向かいます。ここに、木曾義仲の右筆（書記役）だった覚明自筆の大殿若経があるという話を聞き、立ち寄ることにしましたが、今も現存し、市の指定文化財になっています。また、寺の境内には、華山も見たナギの木があります。

次に、華山に随行していた鈴木喜六の縁者である堀切の小久保三郎兵衛の家を訪ねています。三郎兵衛の後見人である小久保政右衛門の案内で、菩提寺の常光寺を訪ねます。常光寺は、侵食が進む南浜からこの前年に移転新築が完成し

たばかりで、華山も「規模宏壮になりて南参第一の精舎なり」と記しています。

『参海雑志』では、第二日目ですが、ここで、お昼を過ぎましたので、国道259号線に出て、東進し、福江で昼食にします。福江市民館前の公園が旧畠村陣屋跡です。畠村陣屋は、畠・古田・向山・亀山・日出・伊川津の六か村と額田郡のうち五か村を合わせ十一か村をたばねる大垣新田藩の役所です。市民館の一部は、かつての福江町役場で、昭和五年（一九三〇）に建設された市内最初期の鉄筋コンクリート建造物です。福江市民館から北の福江湾（当時は畠湊）へ向かう坂は「城坂」と言います。坂を下るとかつての旧福江町の繁華街に沿った旧道です。奥郡と呼ばれた渥美半島西部唯一の商店街で、伊勢・尾張・三河各地とを結ぶ海上の道の拠点でした。十六世紀に間宮水軍として畠村に居住していた間宮家の菩提寺として建立された栖了院を訪ね、住職から墓所の案内をしてもらいました。

渥美郷土資料館と国指定史跡の伊良湖東大寺瓦窯跡を見学し、伊良湖神社を目指します。華山がスケッチした伊良湖明神は、当時は、現在地とは異なり宮山にありましたが、現在の伊良湖神社には、華山と同時期に活躍した糟谷磯丸（二七六四～一八四八）の霊神祠と「糟谷磯丸旧里」の石碑、明治三十九年（一九〇六）に射場拡張のため、伊良湖村が全村現在地に移転した記念碑もあります。次に、伊良湖シーサイドゴ

ルフ倶楽部入口前の芭蕉翁之碑（芭蕉園地）、大岩の上に建つこの碑も『参海雑志』にスケッチされています。ゴルフ場の西に、かつて伊良湖村だった場所に磯丸園地もあり、初日最後には、伊良湖岬灯台への遊歩道の入口に生誕二百五十年記念で建立された糟谷磯丸銅像を見学後、「龍宮之宿」にチェックインしました。

第二日目は、例年の視察と趣向を変え、地元戦争遺跡を巡ります。恋路ヶ浜駐車場から伊良湖岬灯台を目指します。途中には、海軍機動艦隊戦没者慰霊碑や俳人の金子兜太句碑・地元出身の書家、鈴木翠軒「桃源」碑があり、灯台背後の古山斜面には、万葉の歌碑があります。時節柄、渥美半島の風物詩でもある「鳥の渡り」を観察する人が恋路ヶ浜や伊良湖ビューホテル駐車場に多く見られました。日出園地は、伊良湖水道機雷封鎖監視所跡で、恋路ヶ浜が一望できます。次に、小中山町にある正式名称「陸軍技術研究所伊良湖試験場」こと伊良湖射場へ向かいます。田戸神社入口に射場の正門、近くの小中山児童公園に警戒哨舎と境界石柱が残っています。市内戦争遺跡で最も有名な、通称「六階建」（気象塔兼展望塔）と二階建の無線電信所があります。帰路、石神町にある渥美線路盤跡のコンクリート橋と豊島町の渥美線機銃掃射被害地付近に建つ慰霊碑を車窓から見学しながら、博物館駐車場で解散としました。

研究会員 鈴木利昌

公益財団法人華山会  
田原市博物館 からのご案内

田原市博物館企画展のご案内

六月二十六日(土)～八月十五日(日)  
企画展 移動美術館2021

愛知県美術館・愛知県陶磁美術館の  
コレクションから  
(企画展示室)

愛知県美術館からは「生きもの」に  
関係する近代・現代美術を、愛知県  
陶磁美術館からは中世の渥美窯や同  
時代の他の地域のやきものを展示し  
ます。



古賀春江 夏山  
1927年 愛知県美術館蔵

【企画展イベント】(詳細は後日ホ  
ムページにて)

記念講演会 六月二十六日(土)  
ギャラリートーク 会期中二回程度  
実施

十月二日(土)～十一月二十八日(日)  
企画展 太田洋愛展「ボタニカル  
アートで描く世界」  
(企画展示室)

田原市出身のボタニカルアート  
(植物画)の先駆者・太田洋愛の作品  
を展示・紹介します。



太田桜  
1972年 個人蔵

【企画展イベント】

ギャラリートーク 会期中二回程度  
実施

記念講演会 会期中に実施

(詳細は後日ホームページにて)

常設展示

【渥美半島の歴史】 企画展示室1・2

企画展を開催していない時期には、  
渥美半島2万年の歴史を、特徴のない  
くつかの切り口からひもときます。  
(企画展示室2では郷土作家の作品等  
を展示することもあります)

○展示期間 四月十七日(土)～六  
月二十日(日)  
八月二十二日(土)～九月二十六日(日)

【渡辺崋山の生涯と作品】

常設展示室では、渡辺崋山の生涯  
を紹介しています。

特別展示室では、崋山やその師友、  
弟子等の作品を展示しています。

○展示スケジュール  
四月十七日(土)～六月二十日(日)  
崋山と友人たち

曲亭馬琴 桜間青崖 岡本秋暉

六月二十六日(土)～八月十五日(日)  
崋椿系の山と水

八月二十一日(土)～九月二十六日(日)  
崋山と弟子たち

山本栞谷 井上竹逸 小田莆川

十月二日(土)～十一月二十八日(日)  
崋椿系から見る草花

【観覧料】

企画展開催時

移動美術館2021 無料

(常設展示は、平常時料金でご覧いた  
だけます)

太田洋愛展

一般 六〇〇円(四八〇円)

小中生 三〇〇円(二四〇円)

平常展 一般 三〇〇円(二四〇円)

小中生 一五〇円(一二〇円)

(一) 内は二十人以上の団体料金  
東三河在住の小中学生は、ほの国  
こどもパスポート提示で無料。

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は  
その翌平日)、展示替日

(公財)華山会から  
崋山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室  
毎月第四土曜日研究会  
視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第四十六号  
令和三年四月十一日発行  
編集発行 公益財団法人華山会  
理事長 鈴木 愿  
常務理事 林 勇夫  
事務局長 大根義久  
〒四四一―三四二一  
愛知県田原市田原町巴江一二の一  
TEL〇五三一・二二・一七〇〇  
FAX〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

崋山・史学研究会

会長 小林一弘

※崋山会報ご希望の方は崋山会館・  
田原市博物館にお申し出ください。  
次回発行予定 令和三年十一月十一日